



過疎化集落の児童に対するレジリエンスを育む取り組み

著者	中森 涼太, 石田 陽彦, 川崎 圭三, 湯浅 龍, 川崎 俊法
雑誌名	関西大学心理臨床センター紀要
巻	7
ページ	69-78
発行年	2016-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10112/9970

過疎化集落の児童に対するレジリエンスを育む取り組み

関西大学臨床心理専門職大学院 中森 涼太・石田 陽彦・川崎 圭三
関西大学心理臨床センター 湯浅 龍
大阪大学人間科学研究科 川崎 俊法

要約

我が国では、平成10年に自殺者数が3万人を超えて以来、14年連続して3万人を超える状況が続いていた。現在、3年連続で自殺者数は3万人を下回っているが、いまだその数は多いものであり、早期からの自殺予防が重要視されている。そこで、本稿では奈良県の自殺対策事業モデル地区である下北山村で実施された寺子屋事業について報告するものである。本事業は学童期の子どもたちを対象に、早期からの自殺予防という観点から行われた自殺対策事業であり、“こころのふるさと”を育み、レジリエンスを向上させることで、将来的な自殺予防へ繋げることを目的としていた。さまざまな活動を通して子どもたちそれぞれに“こころのふるさと”は形成され、レジリエンスは高められたと思われた。

キーワード：地域臨床、レジリエンス、早期予防

はじめに

内閣府（2012）の自殺対策大綱において“自殺は、その多くが防ぐことが出来る社会的な問題である”との指摘がなされ、中長期的な対策の重要性が指摘されている。奈良県においては、自殺対策事業のモデル地区である下北山村で、学童期の子どもたちを対象とした早期からの自殺予防の取り組みのモデルとして寺子屋教室が事業化され、5年目となった。

5年間という継続的な取り組みを行う中で、夏休みの寺子屋教室は子どもたちにとっても、毎年楽しみにしているものであり、地域での認知が高まっていることが身に染みて感じられる。この5年間、寺子屋教室では“レジリエンスの向上”“こころのふるさとの保持”が主目的となっていた。今年度も目的を引き継ぐことを基本にしつつ、新たなスタッフとの中で様々な体験

が出来ることを目指す。以下本事業の主目的について詳述する。

まずレジリエンスの向上についてであるが、庄司（2009）によるとレジリエンスの定義は様々であり、一定していないのが現状である。そこで、本論文では斧原ら（2014）に従い、“困難な状況にあったとしても柔軟に対応し、何とかうまくやっていく力”とする。このレジリエンスは、自身の主体性を大事にもらい、困った行動に対して叱られるのではなく、なぜそのような行動をとってしまったのか理由をゆっくり聞いてもらうなどの好ましい濃厚な人間関係を基に、多くの経験をしたり安心感を得ることで、自尊感情や自己効力感が育まれることが効果的な影響を及ぼし、向上するとされている（石田，2014）。本事業でも、スタッフと子どもが濃密な人間関係を構築した上で、5日間という限られた期間で、下北山村にある資源（川・

山など)の中である多くの体験により、子どもたちのレジリエンスが向上する一助となることを目指した。

次に“こころのふるさと”の保持についてであるが、下北山村には高等学校がなく、村に住む子どもは中学校を卒業すると同時に村外へ出て行く。今後、子どもたちが葛藤や困難を経験する際に、“こころのふるさと”を思い出すことが出来れば、困難や葛藤に立ち向かう際の一助となると思われる。そこで本事業では、安心できる安全な空間で、村を見つめ直し、仲間やスタッフと様々な経験をすることで、しっかりと保持できる“こころのふるさと”を形成できるような取組みをすることを目的とした。

さらに村という小さな集団では固定化されやすい人間関係に、村外から来たスタッフが加わることで、新たな関係性が生まれる。これは普段の子どもたちがつ関係を鑑みる機会ともなる。また村外から来る、年齢が近い大人と濃密な関わりをもつことは、子どもたちが村外に出た際の関

係づくりにも活かされるものと考えられる。

事業内容

本事業は、夏休み期間中に2クールに分けて実施された。第1クールは2015年8月3日～8月7日、第2クールは2015年8月17日～21日である。

参加児童は下北山村に住む小学1～6年生に加え、北山地区に住む小学2年生2名が参加した。各日程の参加児童数は表1の通りである。児童は4～5名の班を構成し、そこに臨床心理士・臨床心理学を学ぶ大学院生1名がついた。なお、この班は主に班別活動を行なう際に用い、自由時間や川活動の際には解体し、子ども達の主体性に任せていた。

なお、活動場所は下北山村の公民館・やまびこ寮を中心に、必要に応じて村内全域や川などを用いた。全ての活動において、スタッフは安全管理に留意した。

表1 各クールの活動内容と参加児童数

第1クール (8月3日～8月7日)

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
午前	<ul style="list-style-type: none"> 開会式 寺子屋の説明 アイスブレイク 	<ul style="list-style-type: none"> 学習 	<ul style="list-style-type: none"> 学習 	<ul style="list-style-type: none"> 学習 	<ul style="list-style-type: none"> 学習 夏祭り準備
午後	<ul style="list-style-type: none"> 村案内 夏祭り準備 	<ul style="list-style-type: none"> 川遊び 	<ul style="list-style-type: none"> 夏祭り準備 	<ul style="list-style-type: none"> 川遊び 	<ul style="list-style-type: none"> 夏祭り
参加児童数	下北山小学校 17人	下北山小学校 7人 北山小学校 2人	下北山小学校 16人	下北山小学校 13人	下北山小学校 17人
備考	※ボランティアと子どもの関係作りを主目的とする。	※1年生の川遊びは別プログラムで実施(流れの緩やかな箇所遊ぶ)。		※1年生の川遊びは別プログラムで実施(2日目に同じ)。	※夏祭りには中学生や子どもの保護者なども参加。

過疎化集落の児童に対するレジリエンスを育む取り組み

第2クール（8月17日～8月21日）

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
午前	<ul style="list-style-type: none"> 開会式 アイスブレイク 	<ul style="list-style-type: none"> 学習 	<ul style="list-style-type: none"> 学習 	<ul style="list-style-type: none"> 学習 	<ul style="list-style-type: none"> 学習 下北山村すごろくでの遊び
午後	<ul style="list-style-type: none"> 村案内（最初は雨天のため天候が回復するまで室内遊び） 	<ul style="list-style-type: none"> 川遊び 	<ul style="list-style-type: none"> 下北山村すごろく作り 下北山村すごろくでの遊び 	<ul style="list-style-type: none"> 川遊び 	<ul style="list-style-type: none"> 自由遊び
参加児童数	下北山小学校12人	下北山小学校14人 北山小学校2人	下北山小学校17人	下北山小学校15人	下北山小学校16人
備考	※ボランティアと子どもの関係作りを主目的とする。	※1年生の川遊びは別プログラムで実施（流れの緩やかな箇所です遊ぶ）。	※好きな道具を用いて班ごとにすごろくのマスを作成し、班対抗で遊ぶ。	※1年生の川遊びは別プログラムで実施（2日目に同じ）。	※3日目にすごろくで遊ぶ時間を十分に取れなかったため、振り返りを兼ねて遊ぶ。

活動内容

プログラムごとに活動目的と活動内容を述べた後に、その効果について考察する。

学習

各クールとも2日目から最終日までの午前中、それぞれ10分間の休憩を挟みながら1回50分×3回の学習時間を確保した。ただし、第2クールにおいては最終日のみ50分×2回の学習時間を確保し、残りの時間を「下北山村すごろく」で遊ぶ時間に用いた。なお、今回から参加となった1年生は、昨年の様子を参考にして3～6年生とは別の落ち着いた小さな部屋において少人数で学習に取り組んだ。

スタッフが毎回終了時間を明示することで子どもたちは見通しを立てることができ、集中して学習に取り組むやすくなったと考えられる。スタッフは子どもたちに学習を指導するのではなく、疑問について一緒に取り組む人としてかわかることを意識した。スタッフが答えを教えるのではなく、一緒に考えて解決することで、子どもたち自身が主体的に学習に取り組み、自分で疑問を解決できたという感覚を得ることができたと思われる。多くの子どもは学習の時間

で夏休みの宿題に取り組んでいたが、早く終わった子どもたちはスタッフに手作りの問題を作ってもらい、意欲的に取り組む様子が見られた。

第1クールにおいて他の活動の時間中、子どもたち同士が寺子屋のイメージを語り「学習の時間」を挙げた子どもも見られた。子どもにとって夏休みの一時に集まって学習に取り組むという体験がかけがえのないものとして感じられている様子が確かめられた出来事であった。

第2クールでも子どもたちが自主性を持って勉強に取り組むことができるよう、環境づくりに配慮した。夏休みの宿題をすべて終えた子どもも何人かいたが、スタッフが子どもに合わせた問題を作り、学習の時間すべてを何もせず過ぎることがないように対応した。学年の違う子ども同士がお互いに問題を教えあう様子も見られ、普段にはなかった関係性を持つことができたのではないかと考えられる。別室の1・2年生たちもそれぞれのペースで学習に取り組んだ。夏休みの宿題が終わった1・2年生は点つなぎをしたり、小麦粉で粘土を作ってさまざまなものを作ったりと、創造性を育む学習もできた。粘土で作った作品を大事に家に持ち帰る子どももあり、作品を見返す度に夏休みの思い出として寺子屋が思い出されることが期待される。

両クールともに子どもたちがわからない問題に直面しても投げ出したり答えを教えてもらうのではなく、スタッフと一緒に考えていくことで忍耐力が養われたと言えるだろう。そして、問題を自分の力で解けたことによる成功体験がレジリエンスを高めることに繋がったと考えられる。

川遊び

自然豊かな下北山村において、川は子どもたちの最高の遊び場である。今年度は特に第1クール前の台風による影響もあり、川の流が速くなったり、水量が増すなどしていた。これにより、例年、寺子屋事業に参加している子どもたちにとっても様子を変えるふるさと自然を、肌を通して感じられたものと考えられる。こうした体験が村特有の思い出として子どもたちに残っていき、“こころのふるさと”に繋がっていくことが期待される。

川遊びのポイントとしては飛び込みに挑戦できるポイントなどを設定していた。第1クールでは3～6年生は2日目に川下を目指した。その際、川の流に身を任せて移動する様子や高所からの飛び込みに果敢に挑戦する様子が見られた。またその際に子どもたちから「ターザンロープ」と昨年経験した遊びがしたいとの声があがった。4日目に川上を目指した際には、設置したターザンロープを楽しむ子どもの様子や流れの早い川を一生懸命あがる様子が見られ、子どもたちは川を精一杯楽しんでいる様子であった。なお、1年生に関しては安全上の理由から川下の比較的流れが穏やかな場所での別プログラムとなったが、流れに逆らって歩くことを楽しむ子や、生き物を見つけて必死に追いかける子など、それぞれに楽しみを見つけていた。

第2クールでも同じように1年生は川下の穏やかな場所での別プログラムを設定したが、ふるさと自然の川をそれぞれに楽しみながら過ごしていた。3～6年生に関しては2日目、4日目ともに水量が多かったため川上から川下を目指す



写真1 川遊びの様子

ルートに進んだ。飛び込みやターザンロープなどで川遊びを満喫し、楽しんでいる様子が見られた。

子どもたちにとって飛び込みをするポイントは背丈の何倍もの高さがあり、恐怖心から飛び込むことが出来なかった子どもたちも少なくなかった。そんな子どもたちも飛び込みをした周りの子たちの楽しげな様子を見て、「自分も飛び込みをしたい」という思いを抱えていたであろう。このように「飛び込みたいけど飛び込めない」という葛藤を抱えた子どもたちも、最終的には飛び込みを出来るようになっていた。それは、両クールすべての川遊びにおいて同じ川に繰り返し入ることや、周りの子が飛び込みを成功させている姿を見ることが影響していたものと考えられる。それに加えて、飛び込みを成功させた子どもが喜んでいるときにスタッフが一緒になって喜んだり、どうしても飛び込む決心がつかない子どもの悔しさに共感することが重要であったと言えるだろう。飛び込むことができない子どもたちは、飛び込めない自分の悔しさや飛び込みを成功させた子の喜びを、自分のことのように受け止めてくれるスタッフを信頼し、その場を安全な空間と捉えることへと繋がったのではないだろうか。また、各クールにおいて日を重ねるごとにスタッフは子どもたちと関係性を構築したことで、子どもたちはより安心できる枠組みの中で活動をすることができ、成功体験に結びついたのである。一連の川遊び

を通してさまざまな成功体験を経験したことから自己肯定感が高まったと考えられる。そして、出来ないことに直面しても耐え抜き、出来るようになるという経験は、レジリエンスをより効果的に高めるものとなったであろう。また、故郷の川で五感を使って遊んだことによって、“こころのふるさと”としての故郷の川が子どもたちの中に残っていくことが考えられる。



写真2 自由遊び（野球）の様子

村案内

両クールともに班に分かれ、村外の人であるスタッフに対して子どもたちが中心となり下北山村を案内した。また同時に第1クールでは夏祭りの際に必要な素材を集める時間、第2クールでは下北山村すぐろくのマスに書きそうなことがないかを考えてもらいながら、葉っぱや木の実、枝などマスの作成に使えそうなものを集める時間とした。

どの班も口々に案内する場所を相談しており、自分たちの住んでいる村の紹介したい場所をしっかりと持つことが出来ているのだと感じられた。村を一望できる場所や子どもたちの目線で見なければ気がつかない壁の模様などを紹介したり、遠方にスタッフと一緒に出かけるなど、班によってさまざまな場所を案内していた。

子どもたちは村外から来たスタッフに自分たちの村を案内したことに対して、スタッフから驚きや感心の声をもらうことで今まで当たり前感じていた自分たちの村のよいところを再認識することへ繋がったのではないだろうか。また、両クールともにどの班も色々な物を数多く持ち帰ってきており、今まで何気なく通っていた場所に注意を向け、新たな面を発見する一つのきっかけとなったのではないかと考えられ、“こころのふるさと”が強く残ることとなったであろう。

自由遊び

学習の時間の間や昼食後の時間など、プログラムの合間にある自由遊びの時間はプログラムの時間と比べて子どもたちが主体的に遊びを展

開できる時間である。その時間の中でスタッフは特に安全管理に気を配った。例えば、屋外と屋内とで遊びが分かれた際には、スタッフは子どもたちの人数に合わせて流動的に両方に分かれて、子どもたち全員に目を配った。また道路で遊ばないことや屋内では走り回らないことなど必要最低限の約束事も定めて、安全で安心できる空間を確保することを目指した。

子どもたちは野球やおおりおに、話をするなど、スタッフを交えながら色々な遊びをしていた。また、雨で外遊びができないときにはハンカチ落としや震源地などといった遊びをし、全体で一つの遊びをして楽しむという場面も見られた。他にもペットボトルを見つけて的あてをするといった、何気ない物から新たな遊びを作り出す子どもの様子が見られたり、下北山村特有のルールで行われていたじゃんけん列車のルールを子どもたちがスタッフに教えるという場面が見られた。村で親しまれている遊びを子どもたちが主体的に提案し、スタッフに教えながら一緒に楽しむという場面もあり、子どもたちが一体となって遊びが繰り広げられる場面が多く見られた。

自由遊びの時間はスタッフと子どもたちとの関係性が構築されていく時間でもある。子どもたちの過ごし方を否定せず、同じ時間を共有することで子どもたちはスタッフに安心感や信頼感を抱いていったと考えられる。自由時間の中で頻繁に見られた「かくれんぼ」や「おおりおに」といった遊びからは、関係性の構築過程が

顕著に表れているのではないだろうか。「かくれんぼ」ではスタッフが鬼役となり子どもたちを探すことが少なくなかった。隠れる範囲は安全管理のため屋内のみに設定しており、隠れられる場所は極めて限定されていた。しかし、限定されているにもかかわらず子どもたちがこの遊びを好んでする理由は、隠れることを楽しむのではなく、スタッフから見つけてもらうことに喜びや楽しみを見出しているからであろう。子どもたちは自分を見つけてもらうことで、スタッフに大きな安心感や信頼感を抱き、達成感を味わっていたと考えられる。「こおりおに」でもスタッフのみが鬼役に指名されることがほとんどであり、子どもたち全員を捕まえることはほとんど不可能である人数比においてもそうであった。子どもたちは、自分たちが逃げる側に回りスタッフに追いかけてもらうことで、安心感を得ていることが考えられる。子どもたちはさまざまな遊びを通じてスタッフと関係性を構築し、主体性を発揮させながら遊びを展開させていったといえる。

夏祭り

1班(子ども4~5名、スタッフ1名)につき、夏祭りでの出し物を企画から行い、制作・出店するというプログラムであった。本プログラムでは出店内容も定められていなかったため、子どもたちが話し合いをして出店内容から主体的に決定していくことができた。また出店内容に複数の案が出た際には、できるだけ全ての案を実施できるように子どもたち自身が工夫を試みる様子が見られた。

制作の際には、1日目に行った村案内の際に集めてきた自然物などに加工を試みたり、折り紙などを用いて景品を制作する姿や絵を描くなどしてゲームを作るなど、既存の夏祭りにとらわれずに主体的に夏祭りを作り上げていく子どもたちの様子が見られた。また制作途中に子どもから家族を呼びたいとの声があがったため、地域の大人や寺子屋事業への参加経験のある中学生など



写真3 夏祭りの準備の様子

を最終日に開催した夏祭り本番に招待する試みをする事とした。

夏祭り本番には地域の年長者や寺子屋事業への参加経験がある中学生なども参加した。夏祭りでは、子どもが各班の出し物に参加した友人や年長者を楽しませたり、別の班の出し物に参加したりしていた。また当日参加した大人からは「楽しかった」という主旨の発言が多く聞かれただけでなく、「はじめての体験」だったという言葉も聞かれ、充実した雰囲気であった。

第1クールにおいて仲間と協力して1つの行事を作り上げたという体験や、協力して作り上げた行事で保護者をはじめとする地域の年長者が楽しんでくれたという体験は子どもたちが成長していく中でも思い出として残っていくことが期待される。そしてこうした思い出は子どもたちが“こころのふるさと”を形成するうえでの一助となるものと考えられる。また、すでにあるもののみを“ふるさと”として受け止めるだけではなく、自分たちで新たに“ふるさと”と思えるものを作り上げていくことができるといえるのではないだろうか。この行事に村の人たちが主体的に取り組むことで「夏祭り」がふるさとを感じられる行事の一つとなることであろう。

この活動の影響は子どもたちだけではなく、参加した地域の年長者にも及んだことであろう。わが国において、僻地での自殺は高齢者が多いことが特徴である。高齢者の方に子どもがいても

大きくなれば村を離れていく人が多いため、高齢者のみの世帯が多いことが考えられる。配偶者に先立たれている場合などを考えれば独居者の割合も少なくないだろう。子どもたちは親を心配する気持ちはあるものの、僻地であるがために帰省することもままならない。過疎化が進んでいるため近隣の住民の数も少なく、他人と交流する機会は限定されてしまう。さらには高齢者の方たちにとって娯楽となるものも限られており、市街地へ出かけることもままならず、変化の少ない日々を送られていることが考えられる。

このような生活をしている高齢者の方たちに、ほんの1日限りでも喜びを感じられるような機会を設けることができたことに、大きな意味があるのではないだろうか。寺子屋事業の活動として行ったことで、僻地に暮らしている高齢者の方たちが足を運ぶことができ、地域の子もたちと交流する機会が生まれた。高齢者の方たちの変化の少なかった日常に少しの鮮やかさが加わり、例年代わり映えのなかった夏に生きている喜びを味わうことができたのではないだろうか。この経験によって高齢者の方たちが「生きているのも悪くない」、「楽しいことも起こるものだ」と思うことができれば、自殺防止へと繋がるだろう。今回の活動は、僻地で問題視されている高齢者の自殺を防止する一助となるといえるだろう。

下北山村すごろく

下北山村に実際に存在する施設や場所などを舞台にして、班ごとにすごろくのマスの内容を考え、部屋一面を使って巨大なすごろくを作り、班対抗で遊んだ。製作にあたって行った説明は、①マスの内容は下北山村のことならばどのようなものでもよい、②用意してあるものを自由につかってよい、③一回休みなどの指示も自由に決めてよいという3点であった。マスの材料としては画用紙や布、半紙、折り紙や段ボール、マジック、絵の具、墨汁など、さまざまなものをこちらで用意し、自由な発想で製作できるよ



写真4 すごろくのマスの一例

うに準備した。また、村案内の際に拾った木の枝や木の実、葉っぱなどの素材も自由に用いてよいことを提示した。中には地域の人たちから草花などをもってきた子どももいた。地域の人たちにはスタッフが行っている活動を説明し、快諾していただいた。

村案内の時間で実際に通った場所や見たものをマスの内容に盛り込む様子がみられ、学校や車などを立体的に製作している班や、拾った花に着色して色とりどりの花を作る班など、さまざまなものを製作していた。こちらがあまり指示をしないことによって子どもたちの主体的に取り組む姿勢や、創造性がはぐくまれた。

マスの製作を終えた後、子どもたちに自由にマスを並べてもらい、巨大すごろくを作成した(マスを並べてもらう際、各班が製作したマスに加えて各スタッフが1枚ずつ製作したマスと、何も内容が書かれていないマスも一緒に並べてもらった)。各班の中でサイコロを振る順番を決めてもらい、班対抗でどの班が一番早くゴールできるかを競って遊んだ。マスに止まった際はどの班が製作したのかを尋ね、どんな場所であるか、どういった所にあるのかなどを聞いて振り返りをし、マスの指示に従った。

3日目の時間だけではゴールまで遊ぶ時間がなかったため、5日目の学習の最後の1時間を下北山村すぐろくで遊ぶ時間とした。すぐろくを終える際、どの班も止まらなかったマスについても取り上げ、振り返りを行った。どの班の子どもたちも、マスの題材となった場所やものについて、その子たちなりの言葉で一生懸命に説明をしてくれた。この一連の過程を通じて自分たちの村について見つめ返し、魅力的な場所やもの、印象に残っていることなどを改めて表現することで、“こころのふるさと”が形作られていくことに繋がると期待される。また、地域の方たちに立ち入りを快く許可してもらいながら村を見て回ってマスの案を考えたり、製作に使えるようなものをもらったりなど地域の方々からもたくさん協力を得られた。地域の人たちの温かさを感じられる機会となり、“ふるさと”の温かさを強く感じられたことであろう。

総括

本事業においてスタッフは、子どもたちのレジリエンスを高めることを意識してかかわり、地域の川などの豊富な資源を活用したプログラムを設定しているという特徴が挙げられる。また、過疎地域ということもあり、普段の子どもたちに人間関係は固定しがちであることが考えられるが、本事業において村外からのスタッフとのかかわりを通じて、固定しがちであった人間関係が柔軟に変化するものであるといったことを経験することとなった。これらのことから、中学校を卒業して村を離れても、多様な人間関係を形成し、困難なことが起こっても“こころのふるさと”を糧に立ち向かうことが可能なのではないだろうか。

本事業の大きな目的のひとつでもあるレジリエンスを高めるということから、スタッフのかかわり方がレジリエンスを高めるものであったかを振り返る。石田(2014)は濃厚な人間関係を基盤に日常生活では得られない多くの経験や

安心感が得られ、これにより自尊感情や自己効力感が生まれ、レジリエンスの形成が短期間になされやすいと述べている。この濃厚な人間関係の形成におけるスタッフ側の“エフォート”を以下のように説明している。

- ・みんなとなかよく同じことをすることを強要しない。
- ・みんなと揃って活動することを強要せずに、自分からやる気になって取り組むまで待つ。
- ・困ったことをしても教育的な解釈で叱ることはせずに、なぜそのようなことをしたいのか、その理由をゆっくり聞く努力をする。
- ・抽象的な言葉を選ばずに、できるだけ具体的な言葉を選択する。
- ・困ったことが生じたとき、子どもから絶対に逃げずに個人的かかわりを何時間でも持つ。

本事業において、子どもたちの自主性や主体性を大事にしたスタッフのかかわり方は、上記の石田(2014)の“エフォート”を実践していたのではないだろうか。そして、こういった“エフォート”だけでなく、子どもたち一人一人に対して細かなアセスメントを行い、どこまで手を差し伸べどこから自力で頑張らせるかを見極めることで、各プログラムにおいて子どもたちの主体性や自主性を最大限に引き出すことができたと言えるだろう。

また、普段だとなかなか理解してもらえない子どもたちの気になる行動に対して、スタッフが裏側の気持ちを読み取り理解していることを伝えることで、子どもたちの自己肯定感が高められていったのではないだろうか。自由遊びを含めたすべてのプログラムにおいて、ある子どもへの個別対応が必要であると感じられた場合、プログラムを進行することよりも重要であると判断したときには個別対応を優先して行った。子どもたちの様子を見てみるとどの場面においても落ち着きのなさがあったり、集団生活で周囲の人間と上手に関係を作れていなかったりとさまざまな様子がみられた。子どもたちは自分でもどのように対処すればよいかかわからないた

めに、しんどさを抱えたまま過ごしていることが少なくない。このような子どもたちに対して、たとえばプログラムの1つである学習の時間に個別対応を行うことで、十分な時間をかけて個別対応を行うことが可能となる。個別対応を受けた子どもたちに、その後、少しずつではあるがさまざまな場面でうまく対処していく様子がみられた。

スタッフと5日間活動を共にした子どもたちは、主体的に物事に取り組む中でさまざまな体験をし、成功体験を積み重ねていった。したがって、子どもたちのレジリエンスは高められたと考えられる。

川遊びで活用した川は、地域にある資源の中でもさまざまな役割を担っている。川の冷たさを直接肌で感じるということが、夏の思い出として強く刻まれるかもしれない。飛び込むことへの恐怖心に打ち勝って飛び込むことができた子どもには、達成感や自信が生まれたことだろう。また、夏休みという長い休みの間に友達と川遊びができたということが、忘れがたい楽しい思い出となった子どももいるのではないだろうか。

村案内や下北山村すぐろくでは、自分たちが住んでいる村について振り返るきっかけとなったと考えられる。村外のスタッフに対して自分たちの村を紹介することや、村の特徴的なことを題材にすぐろくで遊んだことにより、自分たちの村の魅力を改めて確認したり、新たに発見したことだろう。

夏祭りでは地域の年長者や、寺子屋事業の参加経験がある中学生なども訪れた。これにより地域内の交流が促進され、日常生活における地域内のつながりが強まったのではないだろうか。また、寺子屋事業への参加経験がある中学生にとっては、かつて参加していた寺子屋事業に再びかかわることのできる機会となり、小学生のころに参加していた記憶が強く思い出されたことだろう。高校生や大学生になってもこのよう

に訪れる機会があれば、幼少期の思い出はより鮮やかに残るのではないだろうか。また、これを機に同級生と再会する場としての機能を持つことも考えられる。本事業参加児童だけではなく、地域の人々にとってもふるさとを強く感じられるものとなったといえるだろう。

このようにさまざまな活動による思い出や体験によって、子どもたちの中に形成される象徴が“こころのふるさと”である。これは、これから先起こる困難を乗り越える際の一助となるものであろう。今後も本事業が実施・発展されつづけることを期待する。

謝辞

本事業に際し、ご指導及びご協力いただきました、奈良県医療政策部保健予防課、下北山村教育委員会、下北山村保健センターの皆様にご心より感謝申し上げます。

文献

- 石田陽彦 (2014) 発達障害の子どもたちに、市の教育委員会とKU-RENKAが連携し、自然キャンプを実施する意味について, 社会的信頼学, 2, 73-77.
- 内閣府 (2012) 自殺総合対策大綱—誰も自殺に追い込まれることのない社会の実現を目指して, <http://www8.cao.go.jp/jisatsutaisaku/taikou/pdf/20120828/honbun.pdf> (2015年12月10日取得).
- 斧原藍・今留卓・石田陽彦・川崎圭三 (2014) 体験報告 発達障害をもつ子どもを対象にしたレジリエンスキャンプの実際, 関西大学心理臨床カウンセリングルーム紀要, 5, 55-61.
- 庄司順一 (2009) レジリエンスについて, 青山学院大学教育人間科学人間福祉学研究, 2-1, 35-47.

